

平安和文における文の終止

——源氏物語を資料として——

西 田 隆 政

Termination of the Sentence in *Wabun* of the Heian Period

——Using *The Tale of Genji* as A Point of Reference——

NISHIDA Takamasa

Abstract : Komatsu Hideo assumes that the Japanese literature of the Heian Period uses a text of “connection syntax” in which punctuation does not exist as a stylistic element, because it is unnecessary and therefore does not receive expression. However, that punctuation does not appear to exist does not mean that its function is ignored. Moreover, although a sentence does not exhibit the forms of punctuation like the modern language, not only the predicative form of declinable words etc. but also other syntactic elements perform the function of punctuation. It can be thought that it was a syntactic feature of Japanese to have the ability to maintain syntactic flexibility by using grammatical agreement instead of punctuation marks to show whether a sentence terminates or continues.

要旨 : 小松英雄は、平安朝の和文文献は、書記様式として句読点の存在しない、「接続構文」のテキストであり、句読点をつけることは不要かつその表現性を無視することになるとする。しかし、句読点の存在しないことが句読をおこなうこと自体を否定するものではない。また、現代語のような句点で文をくぎること自体はおこなわないものの、用言等の終止形だけでなく、ほかの構文的な条件の存在によって、そこで文がくぎられることがしめされる場合がある。句読点のような文のきれつづきを明示する符号の存在しないことで、構文的な自在性は保持しつつも、文の終止もしめすことのできるものが、和文の構文的な特徴であったとかがえられる。

1 はじめに

平安朝の和文を読解するにあたっては、古写本などの伝来の本文を翻刻したうえで、句読点をつけるのが一般的な手順である。現行の注釈書の類でも、基本的に句読点がつけられている。ただ、この句読点をつける作業が、どういう認識のもとでおこなわれているのかは、注意されるべきである。すなわち、読解のための便宜的処理であるのか、または、当時の古写本には句読点はなかったものの、文をくぎって認識していたのを明示的にしたのか、である。

しかし、おおくの注釈書では、この点の認識が不明瞭で、とくに理由を明記しないものが大部分である。また、文を句点でくぎるのが当時の文の意識を反映したものであるのかどうかについては、自明のこととしてか、とくに説明されることはない。

その点について、小松英雄は一連の著書のなかで、その問題性を指摘する¹⁾。本来句読点の使用されことなく読解されていたテキストに、現代の意識で句読点をつけること自体が問題であり、それは和文のもつ表現性を無視した行為であるというのが、その趣旨である。指摘の意図は基本的に首肯されるところであり、無自覚に和文の文の認定や句読をおこなうことに

は、再検討がおこなわれるべきである。

そこで、本稿では、小松の説を出発点としながら、句読点の使用されない、和文での文の終止がはたしてしめされるものなのか、またしめされるとするとどのようにしめされるのかという点について、和文の代表的なテキストである源氏物語を資料として、検討していくことにしたい。

2 和文の読解と句読点

源氏物語の注釈書の大部分はテキストに句読点をつける方針をとっている。その中で、玉上琢弥の『源氏物語評釈』(1964a)は句点を使用しないという校訂方針をとっている。凡例から引用する。

二 「本文」は、仮名遣いを正し、まま漢字をあて、わたくしに句読点を切ったが、点はゴマ点のみを用い句点を用いない。現代の句読点法では律しえないからである。(第1巻25ページ)

玉上の校訂方針は、読解のための句読点は自分のかんがえできるものの、実際の校訂「本文」ではゴマ点しか使用せず、句点によって文末を明示することはさけるというものである。そして、その理由として、現代の句読法で和文の文章をくぎることはできないということあげている。句読点を使用しないという点では小松の意見にも通じるが、句読点をきること自体はおこなわれている。また、句読点を使用することがテキストの読解にマイナスの要素ともなりうるという立場と理解することができる。

ただ、玉上も、同時に刊行されつつあった『角川文庫 源氏物語』(1964b)の凡例では、「句読点を付し」とするのみで、とくにその理由の説明がされることはない。これは、こちらのテキストがより一般向けであることにもよる。しかし、さきの方針ともあわせてかんがえると、句読点をきること自体を積極的に排除するという意見ではないことを意味している。

また、おなじような立場で本文校訂をおこなう注釈書では、石田穰二・清水好子の『新潮日本古典集成 源氏物語』(1976)がある。凡例では

一 本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の自体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「」をほどこした。(第1巻3ページ)

とあり、「読みやすい形で提供する」という前提で本

文の校訂をおこなっていることを明記している。この記述は、現代の読者が源氏物語を読解するためには句読点をつける必要性はみとめるものの、それはあくまでも便宜的な処置とする立場であることをしめしている。

しかし、このような校訂方針は、かならずしも一般的なものではない。近年の例でも、『新日本古典文学大系 源氏物語』(1993)、『新編日本古典文学全集 源氏物語』(1994)では、句読点をつけることに、その理由や意味づけがされることはない。単なる校訂の一作業として処理されているのである。

これらの点からすると、源氏物語のテキストを読解するためには句読点をきること自体の必要性はみとめられている、そのなかで、句読点自体の位置づけについては「便宜的」なものとする立場もあるというのが、現状ということになる。ただ、「便宜的」とするものも、ではどうするのがよりよい方法なのかという点については、とくに具体的な方法ががしめされているわけではない。

小松の「和文に句読点は不要」という提言は、一見従来にない大胆なものともおもわれる。しかし、玉上の本文校訂の方法は、これに通じる点があるようである。すなわち、和文の典型とされる、源氏物語のテキストに句読点はなじまないという基本的な立場は共通するとかんがえられる。相違点となるのは、句読点をきる行為自体をどう位置づけるかである。それもふくめて排除してしまうのか、なんらかの句読点は必要であるとするかである。そして、それは和文において、ひとつひとつの文が、どのようにテキスト内に存在しているのかを、かんがえることにもつながってくるのである。

3 和文の構文—「接続構文」と「拘束構文」

小松の「和文に句読点は不要」とする根拠は、和文を「接続構文」のテキストと位置づけるところにある。小松(1997)より、該当部分を引用する。

和文の文体は〈語りかけ〉を基調としている。その文章は、句節をつぎつぎと付け加えていく形をとって構成されており、各句節間の相互関係は、つねに必ずしも緊密でない。構文の基本原理は〈付かず離れず〉である。その特性は、発達の母胎となった和歌からの継承であり、また、口頭言語とも共通している。このような特性を持った構文を《接続構文》と命名する。その対局は《拘

束構文》である。

和文の書記様式には、句読点その他、句節の切れ目や、引用を標示する補助的な符号が発達しなかった。また、特定の語法によって引用部分の範囲を明示する方式もとられていない。しかし、その事実は、表現の曖昧さや書記様式の未成熟を意味するわけではない。和文の文体は、それ自体として、句読点の挿入を積極的に拒否するものである。和文の表現の生命は、句節間の承接関係を柔軟にしておくことによって、文脈に応じた、幅のある理解を可能とするところにある。和文は、本来、仮名文学作品の叙述に適合するように発達した文体であり、それ以外には適合しにくい文体であった。(232～233 ページ)

小松のいう「接続構文」は、和文の書記様式をいかしたもので、「句節」間の承接を「付かず離れず」の形で関係づけ、文脈に応じた幅のある表現性を可能とする構文である。そして、この「付かず離れず」は、句読点のような「句節」の切れ目を限定的に標示する符号が存在しないことに適応して、発達した構文の方法ということになる。

ただ、この規定にも、疑問がないわけではない。それは、和文の構文がすべて「接続構文」であるのかどうかという点である。小松の説明では「それら二つの構文類型の間に断絶はなく、多くの中間的な段階の文体がある」(250 ページ)とされるが、和文の文体がすべて一様のものであるかどうかには、検討の余地がある。和文のテキストでもすべての部分が「接続構文」となっているとはかぎらないという可能性もかんがえられる。

この点については、和文においても、「拘束構文」の例にちかいとされる、今昔物語集のような説明的な叙述の部分がみられる点に注意される。

[1] このむすめ、すぐれたるかたちならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人におとるまじかりける。身のありさまを、くちをしきものにおもひしりて、たかき人はわれをなにの数にもおぼさじ、ほどにつけたる世をばさらにみじ、命ながくて、おもふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にもいりなむなどぞ、おもひける。父君、ところせくおもひかじづきて、年にふたたび住吉にまうでさせけり。神の御しるしをぞ、人しれずたのみおもひける。²¹ (「須磨」431 ページ)

[1] は、明石入道と妻が須磨にいる光源氏が自分た

ちの娘の結婚相手にふさわしいのかどうかという話をした直後で、その娘についての説明がされている部分である。全体が四つの文で構成されているとかがえられ、すべての文末が助動詞「けり」である。また、三つの文が、係助詞「なむ」でなく、係助詞「ぞ」による係り結びの連体形の文末となっている²¹。これらの特徴は、今昔物語集のような説話作品にもよくみられるものであり、「身のありさま」以下の文に明石の娘の心話がふくまれるが、いずれの文も構成要素の関係もわかりやすい、基本的に単純な構造で、「拘束構文」に類するものとかがえることができる。

かたられる内容自体も、娘が容貌よりも気立てがよいこと、自分は身分並の結婚をするつもりはなく肉親と死別したら死も覚悟していること、父親は娘を大事にそだて住吉の神に願をかけていること等のような、非常に説明的なものである。この点も説話作品に通じるとかがえられる。

その一方、この部分の直後は、以下のようにつく。

[2] 須磨には、年かへりて、日ながくつれづれなるに、うゑし若木の桜ほのかにさきそめて、空のけしきうらかなるに、よるづのことおほしいでられて、うちなきたまふをりおほかり。二月二十日あまり、いにし年、京をわかれしとき、心くるしかりし人々の御ありさまなどいとこひしく、南殿の桜は盛りになりぬらん、ひととせの花の宴に、院の御けしき、内裏の上のいときよらになまめいて、わがつかれる句をずじたまひしも、おもひいできこえたまふ。(「須磨」431 ページ)

[2] では、最初の文で、須磨の春の様子がかたられる途中から、光源氏の述懐となり、つぎの文には光源氏の述懐のなかに「南殿の桜は盛りになりぬらん」と文相当の部分が「はさみこみ」²²ではいりこんでいる。文中での主格の転換や、視点のちがう表現の「はさみこみ」のある、典型的な「接続構文」といえよう。

このように、源氏物語の文章では、「接続構文」的な部分と「拘束構文」的な部分がまじりあって存在している。そして、会話文などもふくめた、複雑な構造の長文が多用されるという印象がつよいが、説明的な部分では単純な構造の短文でかたられる例もみられる²³。それゆえ、源氏物語の全体が典型的な「接続構文」であるとまでは、規定しえないとかがえられるのである。

4 「接続構文」内の一文

小松説では、「接続構文」には句読点のような符号が存在せず、構文は「付かず離れず」の関係であるとされる。しかし、「接続構文」内のすべての構文要素がおなじような「付かず離れず」の関係だけで存在しているのかどうかには、疑問がある。やはり、そのなかには、あきらかに「付く」ことや「離れる」ことをしめしているものもあるのではなかろうか。

そこで、この点について、小松 (1999 a) でもとりあげられた、ラ行変格活用の動詞「あり」を例にもちいて検討する。「あり」は、連用形と終止形が同形であり、「あり」という形式だけでは、文の終止を確定する決め手とはならない。ただ、「あり」の場合も、係り結びで係助詞の結びであれば、文が終止する形式となる。

[3] ……はかなきことをいふ人々のけはひも、あやしうみやびかに、をかしき御方のありさまにぞある。そのこととなけれど、世の中の物語などをしつつ、しめやかに、例よりはるたまへり。(「蜻蛉」1970 ページ)

[4] 「……なほさる人は、いとたのもしげなくなむある。また、大納言の朝臣の、家司のぞむなる、さる方にもものまめやかなるべきことにはあなれど、さすがにいかにもぞや。……」と……(「若菜上」1038 ページ)

[5] 「……それだに、かの大臣の、まめだちながら、こなたかなたうらやみなくともてなして、ものしたまはずやはある。まして、これは、おもひおきてきこゆることもかなはば、あまたもさぶらはむに、などかあらん」など……(「宿木」1706 ページ)

[3] は、係助詞「ぞ」との結び、[4] は係助詞「なむ」との結び、[5] は係助詞「や」との結びである。小松 (1999 a) では、動詞「あり」で「はっきり切る場合のためには、係助詞ゾ/ナムで予告して、連体形アルで結ぶ語法があった」(180 ページ) とする。

しかし、係り結びは「曲調終止」ともいうべきものであり、一般の終止形終止とは同列にはあつかえない⁶。「あり」の終止をあきらかにするためだけに、係り結びが使用されるともかんがえにくい。そこで、「あり」の形式で、あきらかに終止していると可能性のたかい例をあげてみる。

[6] おはします殿の東の庇、東向きに椅子たて

て、冠者の御座、ひきいれの大臣の御座、御前にあり。申のときにて、源氏まゐりたまふ。(「桐壺」24 ページ)

[7] 御かへり、いとくろうなりにたれど、「袖のみぬるるやいかに、ふかからぬ御ことになむ。／あさみにや人はおりたつわが方は身もそぼつまでふかきこひぢを／おぼろけにてや、この御かへりをみずからきこえさせぬ」などあり。大殿には、御物怪いたうおこりて、いみじうわづらひたまふ。(「葵」296 ページ)

[8] 大将殿は、「かくさへおとなびはてたまふめれば、いとどわが方ざまはけとほくやならむ。また、宮の御心ざしも、いとおろかならじ」とおもふはくちをしけれど、また、はじめよりの心おきてをおもふには、いとうれしくもあり。かくて、その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳着のことありて、またの日なむ、大将まゐりたまひける。(「宿木」1772 ページ)

[6] は、光源氏元服の様子で、座の位置がしめされて、申の時刻に光源氏がそこに参上されるとつづく。この例では「申のとき」という時刻が「あり」の直後にあり、時間的なへだたりがしめされるので、「あり」できると理解される。[7] は、光源氏から六条御息所への手紙が紹介されて、葵上が物怪になやむ場面へとつづく。「あり」の直前が手紙の内容記述なのに対して、「大殿」はそれと直接関連しない人物である。場面的なへだたりのあることが、人の呼称によりしめされて、「あり」できることがわかる。[8] は、匂宮の妻となった中君の出産に、薫大将が「くちをし」とおもう一方で「うれしく」も感じるとある直後に、藤壺の宮の御裳着と薫大将との結婚へとつづく。ここでは、場面的なへだたりのあることが、指示語「かくて」で明示されており、指示語が「あり」につづく例でも文が終止するとかんがえられる⁷。

以上の例でしめたように、「あり」という語形だけでは、一見すると、そこで文が終止するかどうかは不明瞭なのであるが、直後にくる語により、「あり」以前でのべられた内容との差異があきらかな場合は、文が終止しているとみることができる。動詞「あり」は、その語形だけでは文の終止が判然としないようであるが、直後にくる語によって、文の終止がしめすことが可能ともかんがえられるのである。

つぎに、「あり」で文の終止している可能性のひくい例をあげる。

[9] 明石にも、さこそいひしか、この御心おき

て、ありさまをゆかしがりて、おぼつかならず人はかよはしつつ、胸つぶるることもあり、また、おもだたくうれしとおもふこともおほくなむありける。(「薄雲」613 ページ)

[10] 世の中にさいわひあり、めでたき人も、あいなうおほかたの世にそねまれ、よきにつけても心のかざりおごりて、人のためくるしき人もあるを、……(「御法」1396 ページ)

[11] 女房なども、かの御かたみの色かへぬもあり、例の色あひなるも、綾などはなやかにはあらず。みづからの御直衣も、色は世のつねなれど、ことさらにやつして、無紋をたてまつれり。(「幻」1409 ページ)

[9] は、助詞「も」が「あり」の直前にあり、さらに接続詞「また」が直後につづく。「胸つぶるることもあり」、さらに「また」「うれしとおもふことも」と、対になっている。[10] は、「世の中にさいわひあり」と「めでたき」がともに「人」を連体修飾している例で、これは形容詞の連用形と同様の用法である。[11] は、「色かへぬ」女房「もあり」とのべられてから、さらに例の「色あひなる」女房「も」と説明がつづく。ともに「も」がもちいられる点も、つながりを意識させる。

ここにあげた3例は、のべられる内容に連続性があるだけでなく、構文的な条件や、「も」「また」のような連続性を意識させる語が使用されるのも、文が終止せず、さらにつづくことを明示しているとかんがえられる。「あり」だけでは不明瞭でも、他の文中の要素から、文の連続性がみてとれるのである。

つづいて、句読にさまざまな可能性のある、「あり」の連続する例を検討する。この例は、現行注釈の校訂でも、句点のつけ方は一定していない⁸⁾。

[12] あるじの子ども、をかしげにてあり。童なる、殿上のほどに御覧じなれたるもあり、伊予の介の子もあり、あまたある中に、いとけはひあてはかにて、十二三ばかりなるもあり。「いづれか、いづれか」など、とひたまふに、……(「帚木」66 ページ)

光源氏が、方違えて紀伊守の屋敷にいった際に、「子ども」が紹介される。まず「をかしげにてあり」と全体の様子のがのべられ、つぎに、光源氏の「御覧じなれたるも」あり、「伊予の介の子も」あり、「十二三」歳のもありとつづく。最初の全体の紹介で文が終止し、次の個別の説明では「も」で並列的に三つの「あり」がつづいて、最後の「あり」は、直後に光源

氏の会話のあることから、そこで文が終止すると理解される。

この例では、可能性とすれば、四つの「あり」すべての直後に句点をつけることもありえる。ただ、「あり」が基本的に文をつづけることが可能な形式であることからすると、助詞「も」の使用が判断材料となつて、最初の「あり」とそれ以外の「あり」との差異を判断しうる。おなじような「あり」の連続でも、文の終止する度合いには差異がありえるのである。

以上、いくつかの例を検討してきたが、これらの点からすると、動詞「あり」においては、先の終止する例と同様に、終止しない例でも、前後にどのような語が使用されるかが文の終止を判断する決め手となっているようである。それゆえ、「あり」の語形だけでは不明瞭であっても、文章中でそこで文が終止するかどうかは、読み手には理解できたとおもわれる。

逆にいえば、動詞の語形だけでは判別しにくいのを利用して、原則として文をつなげるようにしてあり、必要に応じて、文をきることも可能にしていたであろう。この点からすると、現代語の文章の意識とは相違するものではあるものの、和文の文章中でも、ひとつの文という意識はあった可能性があるとかんがえられるのである。

5 「はさみこみ」と文の終止

和文においては、ラ行変格活用の動詞や四段活用の動詞のように、文の終止が判断しにくいとされる例があるが、そのなかで、係り結びの結びとなっている部分については、その語形により終止が判断可能とかんがえられる。しかし、かならずしもそうとはならない例もみることができる。いわゆる「はさみこみ」として使用されるものである。

[13] そのころ、藤壺ときこゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける、まだ春宮ときこえさせしとき、人よりさきにまゐりたまひにしかば、むつましくあはれなる方の御おもひはことにものしたまふめれど、そのしるしとみゆるふしもなくて、年へたまふに、中宮には、宮たちさへあまたこころおとなびたまふめるに、さやうのこともすくなくて、ただ女宮ひとところをぞもちたてまつりたまへりける。わがいとくちをしく、人におされたてまつりぬる宿世、なげかしくおぼゆるかはりに、この宮をだにいかでいくすゑの心もなぐさむばかりにてみたまつらむと、かしづききこえ

たまふことおろかならず。(「宿木」1701 ページ)
 [14] 御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四ところおはしましける。そのなかに、藤壺ときこえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊ときこえさせしときまゐりたまひて、たかき位にもさだまりたまふべかりし人の、とりたてたる御後見もおはせず、母方もその筋となく、ものはかなき更衣腹にてもしたまひければ、御まじらひのほども心ほそげにて、……(「若菜上」1025 ページ)

[13] は、宿木の巻冒頭で、「藤壺」から「なむおはしける」までの部分が問題となる。ここまでならば、藤壺と申す方は故左大臣殿の女御でいらっしやうと係り結びで文が終止するとみることができる。しかし、ここではさらに「まだ」以下、藤壺の話題がつづく。そして、「女宮」を「おもちになっていた」というところで、ようやく藤壺の説明がおわる。その結果、最初の「故左大臣の女御になむおはしける」の部分は、「はさみこみ」として理解されることになる。次の [14] にもあげた類例があることから、このように理解すべきであるとかんがえられる。

小松 (1997) では、「はさみこみ」について、「句読点にこだわる〈文法〉の枠のなかで考えるかぎり、《はさみこみ》という構文原理の設定は、矛盾を解消するために望みうる最善の解決であったかもしれない」(262 ページ)として、「はさみこみ」によって、「これまで、所与の句節のあとに句点を付して読まれてきたが、それは誤りであったことが確実に証明された」(263 ページ)とする。しかし、「はさみこみ」のような「拘束構文」に即した原理を導入するまでもなく、テキストを「句読点などを念頭におかず読めば、ここの部分の理解には何の問題もない」(259 ページ)とする。和文を「接続構文」として、句読点の存在自体をみとめないとするならば、当然このような帰結となろう。

もっとも、「はさみこみ」とされる部分が、それ自体で「句節」としてのまとまりを保持している点については、とくに異論のないところであろう。とすると、そうであることを明示するための手段として、読点をつけることはありえるのではなかろうか。読点をつけることが、かならずしも、その部分を文中での「かかりうけ」の要素として明示しているわけではない。現代語の例でも、

大野が一人前になってからである。暇なときに限ってであるが、木庭は軟式野球の大会を覗く日が

あった。ただ、もちろんというべきであろう、いまだに2匹目のドジョウに出くわしていない。(後藤正治『スカウト』(講談社文庫, 2001) 279 ページ)

のように、前後の読点により「はさみこみ」の部分は明示される。もちろん、構文の原理のちがう、現代語の例と和文の例とは同列にしにくい面はあるが、読点の機能を構文要素のまとまりをしめすものとするならば、和文においても、「はさみこみ」への読点の使用は可能であるとかんがえるのである。

また、[13] [14] にあげたように、係助詞と「ける」の結びが、ある部分では「はさみこみ」と、ある部分では文の終止と理解される。これは、「接続構文」としての自在性とも解釈できるが、やはりそこには構文要素としてのちがいがあるとかんがえられる。和文において注意すべきは、このようなほぼ同一の形式のものが、「はさみこみ」にも文の終止にも理解されるような自在性をもちつつ、それがおのずとどちらかに理解されるところにある。それを「接続構文」として、句読点は不要とすることも可能であろう。しかし、文の終止の面を重視すれば、現代語とはちがうものの、句読点をつけて構文を明示することも可能である。

和文においては、述語が文を終止する形式であることが、すなわち文の終止ではないことを意味している。文がそこで終止するかどうかは、それ以外の構文的な条件がどうなっているのかによるということにもなる。それゆえ、いわゆる「終止形」や係り結びの「連体形」は、文終止での必要条件ではあっても、十分条件ではないと理解される。

ここからかんがえられるのは、和文での係り結びの機能は単に文の終止を明示するというものではないということである。それ以外に、係りと結びで呼応する部分がひとつのまとまりであることをしめす例もある。そして、これらは一見すると、ここで文が終止すると理解されるが、[13] [14] のような例では、あきらかに「はさみこみ」となっているのである。

和文での文の終止は、4章の「あり」の例でものべたように、述語の形式という一つだけの条件でできるのではなく、その他の構文的な条件などが決め手となって、判断されるとかんがえられる。この点からすると、和文においては、文の終止がかならずしも不明瞭とばかりはならないようである。一见すると、文を構成する要素である「句節」がつかえるだけにみえても、そこには、文の終止する部分、終止しない部分が存在するのが、みてとれるのである。

6 和文と句読点

和文のテキストには、本来句読点に類するものはつけられていない。校訂の際に、当時の書記様式を再現するというに徹するならば、句読点は不要とすべきであろう。しかし、その中にもあきらかに文の終止をしめすとおもわれる例が存在する。和文のなかにも、文の終止を明瞭にしめす「拘束構文」的な部分をみることができる。また、「連接構文」的な部分でも、同一の述語の語形であっても、文の終止する例と文の終止しない例とがみられる。このことは、和文においても、句読点はないものの、句読に準ずるものはあったということを意味するのであろう。句読点のないことと、句読に準ずるものがないこととは、同列にはあつかえないはずである。

この点を重視するならば、和文においても、それを明示するために、句読点をつける可能性がでてくる。現代の日本語のテキストでは、書き手の句読の意識は、句読点によって明確にしめされ、読み手はそれにそって読解をおこなう。和文のテキストでは、書き手の句読の意識は、構文中のさまざまな要素によってしめされ、読み手はそれを判断することで読解をおこなう。それゆえ、そのような読解法になれない、現代の読者のためには、和文の句読の意識を、テキスト校訂の際に句読点で再現することは、あってもよい行為とかがえるのである。

ただ、当然のことながら、和文における構文のあり方は、現代のそれとはことなっている。とりわけ、読点が構文上の要素のまとまりをしめすものという基本認識を明確にしておくべきである。句読点をつける場合には、その点を明確に認識しておこなうことが必要である。本来、和文校訂の際の句読点は便宜的な処置としてつけられたとおもわれる。それを読解のために積極的に活用するのであれば、句読点をつける意義を明確にしたうえで、和文テキストの読解と校訂がおこなわれるべきなのである。

注

- 1) 小松 (1997) を中心に、本稿では検討する。
- 2) 源氏物語の引用は、池田 (1953) によりページ数をしめた。引用に際して、適宜、かなづかいをあらため、濁点をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。なお、以下の引用中の下線は、私につけた。
- 3) 阪倉 (1956・1993) では、「なむ」の係り結びが物語作品の語りに密接にかかわることを指摘する。

- 4) 佐伯 (1953) による。塚原 (1977) では「挿入表現」と規定する。
- 5) 塚原 (1971) では、源氏物語 (桐壺・夕顔・若紫・柏木・橋姫) の文の音節量調査から、枕草子と比較して、長文の比率がたかいものの、10音節以下の文が1.3%、20音節以下の文が8.7%あることを指摘する。
- 6) 山田 (1907) による。
- 7) 西田 (1999a) では、源氏物語中の地の文文頭での「かくて」が、巻内部での区画をしめすものであることを指摘した。
- 8) 例をあげれば、石田他 (1976) 柳井他 (1993) では四つすべてに句点をつける。阿部他 (1994) では「御覧じなれたるもあり」のみ読点で他には句点をつける。
- 9) 西田 (1999b) による。
- 10) 「この部分」は、小松 (1997) で検討された若菜上での「いまはこよなきほけ人にぞありけむかし」の「はさみこみ」に該当する。

参考文献

- 阿部秋生・秋山 虔・今井源衛・鈴木日出男 1994『新編日本古典文学全集 20 源氏物語 1』(小学館)
- 池田亀鑑 1953『源氏物語大成校異篇 1~3』(中央公論社・調査は第9版による)
- 石田穰二・清水好子 1976『新潮日本古典集成 源氏物語 1』(新潮社)
- 小松英雄 1988『仮名文の原理』(笠間書院)
- 1994『やまとうた』(講談社)
- 1997『仮名文の構文原理』(笠間書院)
- 1998『日本語書記史言論』(笠間書院)
- 1999a『日本語はなぜ変化するかー母語としての日本語の歴史』(笠間書院)
- 1999b『日本語進化のメカニズムー環境への適応としての言語変化』(『国語学』196)
- 佐伯梅友 1953「はさみこみ」(『国語国文』22-1・『上代国語法研究』(大東文化大学東洋学研究所, 1966) 所収)
- 阪倉篤義 1956「竹取物語の構成と文章」(『国語国文』25-11・『文章と表現』(角川書店, 1956) 所収)
- 1993『日本語表現の流れ』(岩波書店)
- 玉上琢弥 1964a『源氏物語評釈 1』(角川書店)
- 1964b『角川文庫 源氏物語 1』(角川書店)
- 塚原鉄雄 1971「源氏物語の語法」(『源氏物語講座 7 表現・文体・語法』有精堂)
- 1977「挿入句ー文章の重層ー」(『国文学』22-1・『国語構文の成分機構』(新典社, 2001) 所収)
- 山田孝雄 1907『日本文法論』(宝文館)
- 柳井 滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎 1993『新日本古典文学大系 19 源氏物語 1』(岩波書店)
- 西田隆政 1999a「指示語「かくて」と源氏物語の段落構成」(『国語語彙史の研究 18』和泉書院)
- 1999b「源氏物語宿木の巻の構成方法」(『大分大学教育福祉科学部研究紀要』21-2)